

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 横木 剛  
学位 博士(文学)  
学位記番号 新大院博(文)第60号  
学位授与の日付 令和2年9月23日  
学位授与の要件 学位規則第3条第3項該当  
博士論文名 近世・近代期の地方湊町における商人資本  
—廻船問屋にみるその源泉と展開—

論文審査委員 主査教授 原 直史  
副査准教授 中村 元  
副査准教授 堀 健彦

博士論文の要旨

本論文は、近世から近代の新潟湊における廻船問屋商人の経営展開を分析し、商人資本の源泉や展開を論じたものである。商人の経営を分析した研究は、江戸や大坂などの大都市商人や地方有力商人を扱ったものなど多くがあるが、米を集積し出荷する「産地湊町」の商人の研究は乏しい。また廻船問屋商人の業態理解や市場における位置づけも不十分な点が多くあり、地方の商業を理解するうえで大きな課題であった。本論文はこうした研究状況に鑑み、新潟湊の商人資本を扱い、その経営の特質を分析したものである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章 買積廻船と廻船問屋

第一部 近世の廻船問屋と買積廻船

第一章 集散地の廻船問屋に投下された北前船資本

第二章 廻船問屋の金融機能と商品集積

第三章 経営規模の拡大と資本回転の行き詰まり

第二部 近世近代移行期の新興廻船問屋

第一章 老舗廻船問屋の廃業

第二章 前田松太郎への問屋株譲渡

第三部 地方商人資本の近代化

## 第一章 齋藤喜十郎家の企業展開と投資行動

### 第二章 大正期における齋藤喜十郎の経営と政治行動

#### 終章 商人資本の源泉と展開

序章では研究史整理に基づき、上述した本稿での論点を導き出している。

第一部では近世後期から幕末にかけての新潟湊を代表する廻船問屋当銀屋江口家について主に決算資料をもとに検討し、以下の結論を得た。当銀屋は、日本海海運において活発に活動をはじめた北陸地方の買積廻船との商業取引で廻船問屋業を発展させた。商品と廻船の運航には季節性があり、そのために預けられていた廻船側からの商業資金を、他人資本として自らの経営に取り入れ運用していた。金融市場において当銀屋はもっぱら貸手であり、それら資金は町人や領主層に貸し付けられ、それによって得られた利足収入は、商業利潤とともに自己資本として蓄積されていく。幕末期にはその自己資本を用いて、遠隔地の廻船主へ貸付を行う例も見られた。他人資本を金融活動に投じることによって維持されてきた経営は、幕末期になり、貸し倒れの増加と社会情勢の急激な変化、廻船側から要求された資金引き上げによって破綻した。

横木氏は、広大な後背地における米の生産と、圧倒的な量の米の集積があったという地域的な特徴は、新潟湊（港）の商業を成立させる大前提であり、ここから生み出される経済余剰が様々な経済主体の資本形成に及んでいる、と述べている。近世においてこの米が換金された際の収益を多く蓄積したのは、遠隔地間の価格差で収入を得ていた買積廻船主である。買積廻船からの資金は湊町の商人へ他人資本という形で還流し、当銀屋はその資本を流通過程での金融へ投じた。湊町の商人が行ったこの投資は、なんらかの物的資本を形成するためではなく、また最終的に自身の商業規模拡大へとつながる米の生産性向上のための、産地への設備投資などでもない。この点は資本形成対象の近世的な事例として位置付けることができる、とする。現代と比べて輸送に時間がかかることや、商品作物の収穫や廻船の運航に季節性があることによって商品が在庫として存在する時間が非常に長かったからである。一種の前貸資本、在庫投資にあたるものであり、いふならば資本を流通過程の時間に投資していたということになる、と評価している。また、近世は工業化が大きく進展する前段階であり設備投資の機会はそれほどなかったという側面もあるとしている。

第二部では幕末に廻船問屋業に進出し、明治初期に活動した前田松太郎について、取引廻船との関係を中心に分析し、以下の諸点を明らかにした。前田家は買積廻船業で蓄積した自己資本を廻船問屋業へ投じて業態転換をはかった。しかし参入した市場は株仲間の枠組みによって旧来の商人に大きな権利があり、参入当初は経営を思うように発展させることはできなかった。明治になり新興廻船主を多く扱うことで商業は回復するが、取引相手は零細な船主が多く近世期の当銀屋のように廻船側に商業資金を依存することは難しかったと考えられる。

金融市場では借手であり、商品担保などによって資金調達を行っていた。前田松太郎の経営は幕末から近代への狭間で相互の時代からの圧力を受けたという印象が強いが、商業利潤を近代的な汽船業や商業施設に投資した点が注目される。これらの設備投資は、結果的に前田の自己資本が脆弱だったために齋藤喜十郎へ受け継がれていくことになった。買積廻船との商業によって資本がもたらされる点は近世と同様だが、その投資先として社会資本の発展が見られるようになったことは大きな時代の変化であり、近世から近代への経済発展の典型的な事例と言える。新潟において運輸業の近代化を目論むことは、港町の商業や周辺に様々な波及効果を生み出す期待が高く、汽船業を創業し二隻の度津丸を調達した前田松太郎らの投資行動は大きな意義があったと考えられる、としている。

第三部では近代の新潟において三大財閥の一つにあげられた齋藤喜十郎について、企業経営や投資行動、政治進出などについて検討し、以下の諸点を明らかにしている。齋藤喜十郎はもともと自分荷の酒を廻船で輸送していたが、その後複数船を擁する買積廻船業へと発展した。松方デフレ期には土地集積を図って寄生地主化し、作徳米が齋藤家の収入の基礎となった。明治後期には機関銀行を設立し地域の資本を集めるとともに、そこからの借入金によって工業や汽船業を発展させた。また有価証券投資は自家経営企業の支配強化を基軸に行われたが、配当収入や売買差益を狙った幅広い銘柄に投資する様子も見られた。そしてこれらの資本形成は実業家として地域社会のリーダーを期待されることにもつながった。

終章では、以上の検討で扱った当銀屋、前田松太郎、齋藤喜十郎の三家について、商業内容・資本形成・金融市場の3つの観点から整理を行い、それぞれの時代における経営展開の特徴を示している。地方湊町の商人資本は、時代に応じて変化していく市場ネットワークの中で全国市場と地域市場を結びつけ、経済連関を円滑化する役割を担ってきたが、近世から近代へ経済システムや産業構造が大きな変容を遂げるなか、それぞれの対応のあり方を長期にわたって明らかにしたものである、とまとめることができる。

#### 審査結果の要旨

本論文の大きな特長は、18世紀後期から20世紀初頭にかけての150年にわたり、それぞれの時期に新潟湊で顕著な活躍をした商人を取りあげ、それぞれの経営帳簿等を詳細に分析することによって、各経営主体の経営活動の特質を導き出した点にある。こうした分析は、とりわけ新潟湊においては、史料の少なさ等から従来取り組まれてこなかったが、横木氏は残されたわずかな史料から財務諸表や取引先一覧を作り出し、ことに取引先については現地へ赴き関連資料を博捜することによって、氏独自のオリジナルな結論に結びつけたことは、本論文の最大の成果である。

例えば近世の廻船問屋については、従来その業態の理解も不十分であったが、本論文では、その経営の中核が廻船の商品売買の仲介であるとともに、主要商品の季節性にも規定された金融活動であり、しかもその流れは買積廻船から廻船問屋そして湊町商人へと流れていくことを明快に示した。こうした金融の閉塞が廻船問屋経営を窮地に落とし入れることもまた重要な指摘である。

また従来漠然と大商人としてのみ捉えられていた前田松太郎や齋藤喜十郎の、経営者としての性格を、近世・近代双方の資本発展の限界のもとでその橋渡しを担った前田、機関銀行を中心とした企業家であるとともにある時期から投資傾向が変化する齋藤、といった形で明瞭に示したことも、前述した史料操作・博搜に基づく成果である。

これらの氏のオリジナルな分析の成果の一方で、本論文が「生産と消費、その流通を媒介する商人資本が果たす意義と役割は、どの時代においても地域経済の要といえよう。」と締めくくられていることに象徴的に示されるように、全体をまとめる段階になると、自身が明らかにしてきたはずの、150年にわたる各時代の、それぞれの経済主体の活動の特徴の歴史性、あるいは新潟湊の特殊性と普遍性といった視角に、ややもすると無自覚になる傾向が見られる。

しかしながらこうした弱点を差し引いてもなお、氏によるオリジナルな分析が導いた幾多の成果は大きなものであり、今後の地方都市商人研究では必ず参照すべきものとなるであろうことは確実である。

なお本論文第一部第一章は『佐渡・越後文化交流史研究』、第三部第一章、第二章は『新潟史学』にそれぞれ査読のうえ掲載された論文をもとにしており、これらに先立つ新潟史学会・新潟郷土史研究会での口頭発表とともに、既に一定の評価を得ていることも付言しておく。

以上から本論文審査委員会は、当論文が博士論文として十分な水準に達していること、またオーソドックスな文献史学の成果であることから、博士（文学）の学位を授与するに値するものであると結論づけた。